



Liaison Center News

●東京水産大学地域共同研究センターニュース 2003年1月 Vol.3 No.3

巻頭言

東京水産大学副学長 佐藤 要 (海洋生産学科教授)



師走ともなれば何かと気ぜわしい昨今です。気象庁の長期予報では暖冬予想が立てられていますが、今冬の寒さは例年にならぬほどの厳しさを感じます。

すでにご承知のように東京水産大学は東京商船大学と統合し、平成15年10月1日に名称を東京海洋大学(仮称)として新生の大学が誕生します。両大学とも百年有余の歴史と伝統を誇り、教育・研究業績にも優れた実績を残しています。先発組として平成14年10月1日には2つの新大学が統合により誕生しています。来年10月1日には我が大学の統合を含め10の新大学が創立予定であります。しかしながら、我々の大学の統合は他大学の統合とは些か異質で、将来の発展と社会からの付託に応えるために、両大学の理念・目的を高度に融合させた新しい大学造りを目指しています。具体的には海・船・人に関する国際的な一大教育・研究の拠点として、21世紀において輝ける存在である世界に伍した大学を射程にしています。特に人口の爆発的增加に伴う世界的な食糧及びエネルギー危機の打開、産業の無秩序な発展による地球規模的な環境破壊問題などは早急にしかも真摯に取り組まなければならない課題です。すなわち新大学として海洋資源の確保、海上輸送技術の高度化、環境保全、海洋政策等新しい視点からの教育研究分野の創出が課題となりましょう。

一方既存の付属施設も新たな位置づけを考えなければなりません。図書館、保健管理センター、練習船、地域共同研究センター、実験実習場、情報処理センター等です。何れの施設も両大学に重複して現在は設置されていますが、社会的諸事情を勘案すれば研究・教育、地域社会等へのサービスの低下を招かないように配慮された一組織に統合することが妥当でありましょう。例えば地域共同研究センターは大学の統合を期に『社会連携推進共同研究センター』として設置される予定であります。同センターは大学の知的資産を活かし、地域社会と関連産業に貢献し、『研究』、『教育』に付加し、第三の使命としての『社会連携』を民間との共同研究等を通して大いに進展させなければなりません。東京水産大学においては平成12年度に地域共同研究センター(リエゾンセンター)が開設され、13年度にはセンター内に連携支援調整室が設けられました。更に14年度には大学の活動を支援する東京水産大学産学連携協力が活動を開始しました。開設後3年の期間ですが、その活動は目覚ましく、第三の使命を果たすべく着々と発展していると考え次第です。センターの業務内容は、①水産関連産業の技術研究開発、②市民生活に関わる課題への対応、③専門知見による社会に対する支援貢献、④首都圏と水産基幹地方への社会的、文化的、技術的な貢献、⑤大学の保つ知的資産を関連地域、経済界の活性化に活用するためのシステムの構築、⑥地域社会に貢献し、国際的視野に立つ人材育成に関わる活動等と理解しています。新大学においてもその重責を担って大いに精励し、活躍していただきたい所存です。

一方既存の付属施設も新たな位置づけを考えなければなりません。図書館、保健管理センター、練習船、地域共同研究センター、実験実習場、情報処理センター等です。何れの施設も両大学に重複して現在は設置されていますが、社会的諸事情を勘案すれば研究・教育、地域社会等へのサービスの低下を招かないように配慮された一組織に統合することが妥当でありましょう。例えば地域共同研究センターは大学の統合を期に『社会連携推進共同研究センター』として設置される予定であります。同センターは大学の知的資産を活かし、地域社会と関連産業に貢献し、『研究』、『教育』に付加し、第三の使命としての『社会連携』を民間との共同研究等を通して大いに進展させなければなりません。東京水産大学においては平成12年度に地域共同研究センター(リエゾンセンター)が開設され、13年度にはセンター内に連携支援調整室が設けられました。更に14年度には大学の活動を支援する東京水産大学産学連携協力が活動を開始しました。開設後3年の期間ですが、その活動は目覚ましく、第三の使命を果たすべく着々と発展していると考え次第です。センターの業務内容は、①水産関連産業の技術研究開発、②市民生活に関わる課題への対応、③専門知見による社会に対する支援貢献、④首都圏と水産基幹地方への社会的、文化的、技術的な貢献、⑤大学の保つ知的資産を関連地域、経済界の活性化に活用するためのシステムの構築、⑥地域社会に貢献し、国際的視野に立つ人材育成に関わる活動等と理解しています。新大学においてもその重責を担って大いに精励し、活躍していただきたい所存です。

目次

巻頭言<副学長 佐藤要(海洋生産学科教授)>	p.1
センター長ご挨拶	
<センター長 渡辺尚彦(食品生産学科教授)>	p.1
LCインタビュー<共通講座主任 小松美彦教授>	p.2
トピック	
「第2回水産養殖技術展」	p.3
「水産ゼロエミッション研究会 第1回研究会の開催」	p.3
「三宅島漁業復興シンポジウム」報告	p.4
「天草町ふるさと応援隊活動」報告	p.4
「全科展in東京2002」	p.4
「テクノオーシャン2002」	p.5
「産学共同セミナー「出前講義」について」	p.5
寄稿 産学連携学会設立について	
<九州芸術工科大学地域共同研究センター教授 湯本長伯>	p.6
若手コーディネータの会のお知らせ	
<NEDO 河口真紀研究員>	p.6
センターからのお知らせ 関連会議・イベント情報	p.7
産学連携協会のコーナー	
・協会後援イベント「就職ってどうなの？」開催報告	p.7
・協会関連イベント記録	p.7
主な出来事と来訪者	p.8
スタッフ紹介	
・小金民造客員教授	p.8
・川村香織技術補佐員	p.8
編集後記	p.8
連絡先	p.8

センター長 ご挨拶

センター長 渡辺尚彦 (食品生産学科教授)

コンピュータに限らず携帯電話・電子レンジ・自動車のエンジン等、今やあらゆるところに集積回路(ICという)が使われていますが、日本がICを使った大容量のメモリを生産して世界に輸出して稼いでいた時代に(といっても数年前)ICの基本特許の実施料として米国テキサス・インスツメント社(TI社)に日本の各社は数千億円を支払っていたと聞かされています。集積回路の発明者としてTI社のキルビーとフェアチャイルド・セミコンダクター社(ベンチャー企業)のノイスとがそれぞれ特許権を争ったことから有名な特許係争事件になったのだそうですが、現在は技術が進んで当時とは全然違う方法で製造されているにも関わらず集積した回路にするという基本的な考え方が、基本特許としてとられていると、それが他人の手によって実用化された時にも大きく物を言うわけです。ノーベル賞を受賞するのは科学者の夢ですが、基礎研究の成果が実用化され基本特許として世界中から評価されるというのも科学者の夢だともいえます。日本は特許出願数では世界のトップだが基本特許がとて少ないのだそうです。

大学法人化後は大学で生まれた発明の権利は大学有になり、大学の責任で出願する必要が出てきますが、特許にするには経費が掛りますから何でも出願すると言うわけにはいかなくなります。大学らしい特許と言うのは実は基礎研究をベースにしたものではないでしょうか。基礎研究だから特許と関係がないのではなくて、ほんとに物を言うのは基礎研究から生まれる特許なのです。私も自分では特許にならない基礎研究だと思って発表してしまったものがリエゾンセンターに来ている特許の専門家から「それこそ基本特許になるものだった」と指摘されて愕然としました。皆さんも論文発表してしまったものどどこに基本特許になるものがあつたか、一度じっくり検討してみてください。

お伺いしたのは共通講座主任小松美彦教授です



●小松先生の研究の紹介～倫理学的側面から科学・技術、そして生命を考える

○先生はどんなことを研究されているのか教えてください。

「科学史」を専攻しています。ここ10年余りは「生命倫理学」にも領域を拡げています。

○科学史というのは、科学の歴史ということだと思うのですが、内容を簡単に教えてください。

科学技術を良い方向に改革していくために、その歴史を研究するのが学問としての科学史です。科学理論そのものがどのように展開してきたのか、科学理論と文化・社会・政治・経済・宗教などはいかに相互に影響しあってきたのか。そうした歴史を検討します。対象は自然科学、方法は人文科学、というのが特徴です。

○生命倫理学についても内容を簡単に教えてください。

現在、脳死・臓器移植や体外受精やクローン技術など、さまざまな先端医療やバイオテクノロジーが登場してきていますが、生命倫理学とはそれらの導入の是非や、導入をめぐる問題を原理的・学際的に考える学問です。さらには、新規技術を導入する場合、整備すべき法的条件や倫理基準なども検討します。私の場合、特にマクロな視点、文化・文明論と歴史的な視点を重視しています。○科学史や生命倫理学という学問をはじめられたきっかけは何ですか。

もともと私は、「生命」や「死」とは何かに関心がありました。通常はそうした場合、生命諸科学の切り口から迫るわけですが、私も大学の学部時代には発生学の研究室に在籍していました。が、大学院からは科学史・科学哲学に専攻を変え、「生命」や「死」が生物学や医学の中で歴史的にどのように捉えられてきたのか、ということの研究してきました。その延長線上で、生命倫理学にも足を踏み入れた次第です。

○先生は、現代思想論や生命倫理学の授業をされていますが、学生たちの反応はいかがですか。

かなり関心を持って授業を受ける学生が多いと感じています。マスコミににぎわすトピカルな問題を扱っているからでしょう。しかも、これらの問題は死生観の地殻変動という一大事態にも関わっています。学生はそうした問題に一定の関心と不安を持ち合わせているものの、しかし、マスコミ報道だけではよく分からない。また、それらを扱う授業があまりない。そうしたことが背景にあると思います。授業すべてが日常生活に直結する必要はむしろありませんが、一般的に学生は、大学で勉強していることと日常生活とのズレを感じているようです。しばしばそのような声から寄せられます。

○そのような「ズレ」を授業の中でどんな風に解決しているのですか。

生命倫理学の授業では、単に先端医療の技術的側面や倫理問題を抽象的に言葉として習得するだけでは、やはり「ズレ」の感覚がつかまとうでしょう。ですから、実感に響くようにビデオを用いて視覚に訴えたり、日常生活の問題に結びつけて論じ、我がこととして考えてもらうように努めています。要は、日常とアカデミズムの、具体と抽象との、円環的思考の錬磨を主眼としています。また、ここは水産大学ということもあり、扱う範囲を拡げています。例えば、21世紀の最大の課題と目されている環境問題もとりあげ、鯨と人間の歴史的なかわりといったテーマも織り込んでいます。しかし、やや細かな話になりますが、鯨と人との関係は何も「食」の面だけではないし、考えるべきことも捕鯨と環境保護との問題に留まらない。そもそも西欧の近代化において、ガス燈の燃料は鯨の頭油でしたし、頭油は産業革命時から1970年代の第3次中東戦争にいたるまで、機械や兵器の潤滑油に使われてきました。イルカ兵器すら研究されてきた。また、近年では、イルカは知的障害者のセラピーに力を発揮しているし、鯨どうしの交信は言語学からも注目を浴びています。このように、1つの

問題を多角的に考察するようにしています。こうした多面的な考察が「ズレ」の解消にもつながるのではないかと、思っています。

●共通講座の主な研究内容の紹介～多様で個性的な人文教育系研究陣

○共通講座は非常にさまざまな分野の先生がいらっしゃると思いますが、どんな特色があるのでしょうか。

共通講座には人文・教育系の教員が10名在籍していますが、何人かずつがチームを組んで共同研究しているのではなく、基本的には各人が独立した形で研究に取り組んでいます。これが他学系科とは一番異なる点で、特色としてあげられると思います。

○具体的にはどういった研究をなさっているのですか。

大別すると3系統あります。

1つが「語学・地域文化系」。このグループに属する教員の専門は、アメリカ文学やフランス思想など、多岐に渡っています。教育に関しては、英・独・仏の語学とその言語圏の地域文化論を担当しています。

また1つが「教育系」。東京水産大学の場合は水産高校の教諭になる学生がいますから、その学生に対して、教育心理学や教育方法論などを専門としながら、教員免許取得に係わるプログラムと授業に重きを置いて研究を進めています。

さらに「科学文化論系」です。哲学、科学史・技術史、生命倫理学などを専門としています。授業については、現代の科学技術を哲学と歴史と倫理の3側面から考察し、全体をカバーしています。

●社会貢献に対するお考え～「産」に偏った一面的な活動にならないように

○大学の使命として第三番目の柱に「社会貢献」というものがありますが、これについてどのようにお考えですか。

共通講座主任としてではなく、個人的な意見として述べさせていただきます。結論から申しますと、社会貢献自体は非常に重要なことだと思いますが、現在の方向性については疑問があります。というのも、大学が社会に開かれるべきという時の社会というのが、産業界のみになりつつあるのではないかとこの感があるんですね。大学が「リエゾン」すべきなのは、一般的な市民・国民でもあると思っています。

○地域共同研究センターでは社会貢献、もっといえば産学連携には実は、2つの側面があると思っています。ひとつが、基礎研究を実用化研究にするというプロジェクトマネージャー的な活動です。もうひとつは、異なる価値観や異なる基盤を持ったものを統合させる・連携させるという活動です。ですから、産学連携の「産」と「学」は異なる文化世界を象徴する言葉であって、必ずしも産業界と大学と言い切れるものではないと考えています。

はい。なればこそ、さまざまな点に関して細心の注意が必要だと思います。例えば、「産」が応用、「学」がその基礎研究、といった見方が強くなっていますが、「産」に要請された短期的な成果に結びつくものだけが、現実的には基礎研究として許容されかねない。科学技術の基礎研究には、タイムスパンの長い自由な土壌が保証されるべきだと思っています。今回の2人の日本人のノーベル賞同時受賞という快挙も、そうした土壌の賜物でしょう。「産」と「学」という異文化のままに異文化性を、地域共同研究センターがどれだけ大切にできるかが問われていると考えます。

○そうですね。異文化を尊重し、多様性を大切にしながら今後も活動を行っていききたいと思います。

一般的に産学連携に対して疑問を持っていることも事実ですが、特に東京水産大学の場合には、現実問題として産学連携は重要であると感じています。今後そうした視点から、経済的状況を常に把握しながら、社会に対する還元の方法や大学運営に関して展望を積極的に図っていくべきだと思います。

●小松先生からのメッセージ～特に学生達へのアドバイス

○今後のリエゾンセンターの活動に何かアドバイスをいただければと思います。

「水産」という市民生活に極めて関係の深い分野に足を据えた活動には、さまざまな可能性が開かれていると思います。すでにお考えになっていらっしゃることもかもしれませんが、例えば、社会的関心がとみに高まっている食の安全性に関して、従来のように「産」でも「官」でもない、第3の機関を創設することがあげられます。安全性を独自に責任をもって検討し、その情報を発信

していく機関です。今後は、いろいろな大構想を立ち上げて、いかにわかりやすくプロパガンダするかが肝要だと思います。その際、外部とのリエゾンだけではなく、内部でのリエゾン活動も慎重に進めていく必要があるのではないのでしょうか。

○本学の学生に対するメッセージは何かありますか？

3点ほどお話しします。

第1は、学生諸君には不快なことだと思いますが、学力低下・教養低下に関することです。この問題はたとえ理科系の学生であっても、結局は国語力（日本語力）と歴史的な知識の低下に帰着すると思います。この2つはすべての基礎であり、社会人になってからも常識の有無を決定する事実上の基準でしょう。そうした基礎的な素養を、今からでも自ら鍛え上げて欲しいと思います。

第2は、自分の研究の社会的位置を内省するために、理系の学生は人文・社会系のことも学ばなければならないということです。逆に、世の中が基本的に科学技術によって成立している以上、文系の人は自然科学も習得せねばならない。つまり、誠に大変ですが、基礎的な事柄に関しては全部やる必要がある、ということです。

第3は、あらゆる物事に関して、一見自明な大前提を顧みる姿勢を養ってもらいたいということです。学問でも社会問題でも日常生活でも、何らかの事柄が常識として前提となっていて、通常は常識であることすら顧みられません。しかし、そこに目を止めることがいたって重要です。例えば、歴史上おそらく最高の科学理論であるアインシュタインの相対性理論でさえ、それまで疑われることはなかった時間と空間の絶対性を問い直すことを端緒としています。どんな些細なことからも構いませんから、ぜひともこうした姿勢を実践に移してみてください。きっと知的な「面白さ」が生まれるはずですよ。

インタビュー後記

小松先生とは面識もなく、インタビュー前少々緊張していましたが、先生の穏やかな物腰に緊張をときほぐされた気がします。インタビューの中では、生命倫理学といういわば社会的にも大変ホットな分野の研究者として、科学的・客観的な立場からの刺激的で真摯な意見をたくさん頂きました。活発化してきたセンターの活動の足元を絶えず見直すためにも、今後私たちの活動の参考にさせていただきたいと思います。本当に貴重な時間を頂きましてありがとうございました。（河口）

トピック1 第2回水産養殖技術展

地球的規模で進歩しつつある水産増養殖、およびその関連産業に係る技術の現況を紹介する「水産養殖技術展」も、今年で2回目を迎えました。今年の技術展は「第22回全国豊かな海づくり大会」の一環として、韓国・中国・台湾などのアジア諸国からの来場も鑑み、養殖事業の本場である長崎市はアリーナかぶとがににて、9月19日（木）から20日（金）にかけて開催されました。国際学術講演会である「水産養殖の新たなパラダイム」や「日本水産増殖学会第一回大会」も同時開催され、世界の水産養殖業界の指導者、ならびに世界の養殖産業界の現場で最先端の養殖技術を駆使している練達および新進の研究者が集結しました。



本技術展に、リエゾンセンターではブース出展を行い、技術相談やセンターの活動内容の紹介等を行ないました。同時に、本学の研究取組みを、「種苗・養殖」のテーマと、それを取り巻く昨今市民生活を脅かす「食の安全」問題をテーマとして紹介しました。

リエゾンセンターの本技術展への出展は今年がはじめてでありましたが、多くの方々におこしいただき、本学の取組みに非常に興味を持っていただきました。リエゾンセンターでは、今後も「水産」という市民生活に極めて関係の深い分野のさまざまな問題の解決に貢献し、全国の水産関連研究者と水産企業、各種団体との仲介者たらんと考えています。

（NEDO受託研究員 河口真紀）



トピック2 水産ゼロエミッション研究会 第1回研究会の開催について

水産分野におけるゼロエミッションについては、以前からセミナーなどが開かれていましたが、水産物の利用やゼロエミッションに関連してシンポジウムが開催されたのは平成12年度日本水産学会秋季大会（於福井市）が初めて、昨年10月の水産物の有効利用法開発に関する国際シンポジウム（於京都市）が次かと思われます。これらのシンポジウムでは、水産物の利用だけではなく環境問題への取り組みの重要性が指摘されました。そこで、今年2月に発起人が集まり、次いで4月17日に立ち上げ会を開いて会長に坂口守彦氏（京都大学名誉教授）を選任、更に平成14年10月30日（15時～17時於学生会館2階会議室、その後、17時半より19時半まで大学生協にて懇親会）に初回の研究会を開催しました。ここで、この第1回研究会についてご報告いたします。

研究会の参加者は50名、懇親会40名と多くの方のご参加を頂きました。研究会は坂口会長が研究会設立の経緯について説明した後、高橋是太郎氏（北海道大学大学院）を座長に、講師に桑原隆治氏（農林水産省）と松田美夜子氏（富士常葉大学）のお二方をお招きし、それぞれ「バイオマスニッポン総合戦略について」、「21世紀の廃棄物対策」との演題で、ご講演頂きました。特に、研究会の発想の根源を水産にとらわれないよう配慮したつもりでしたが、参加者の方々からこの講演内容を喜んでいただけたことは幸いでした。



講演の様子：演者は左から桑原先生、高橋先生。



懇親会にも多数の参加者で活発な交流が持たれました。

（水産ゼロエミッション研究会事務局 信田臣一・難波秀博）

トピック3 「三宅島漁業復興シンポジウム」報告

三宅島噴火後、大学では学内プロジェクトチーム（主に海洋環境学科）を結成し、海鷹丸による海洋調査や渡島による火山灰試料の入手などを実施してきました。

この度、標記シンポジウムを、地域貢献の一環として、東京都水産試験場（岩田光正場長）と共催で、平成14年10月12日（土）13：00～17：00都庁（新宿）の都民ホールで、約200名（三宅島関係者50名を含む）が参加して行いました。

講演内容は基調講演：「伊豆諸島における噴火災害と漁業」、研究発表：（1）火山噴火後の三宅島の現状、（2）三宅島周囲の浅海域における高濁水の分布と挙動、（3）2000年火山灰の化学的特徴と成分の水への溶出、（4）噴火後の三宅磯根漁場と水産資源の現状、（5）火山灰のフクトコブシへの影響、（6）火山噴出物を活用した海藻礁実験、であります。大学から前田勝教授、荒川久幸助手及び連携大学院の青野英明助教授がそれぞれ発表しました。その後、両機関代表者によるパネルディスカッションを行い、災害漁場の修復や漁業の活性化などの復興の方策を話し合いました。この企画の担当者一人として、大学の社会貢献が問われている現在、今後も息の長い地道な対応の必要性を痛感しました。参加者にはアンケート回収後、島特産の明日葉・サツマイモ・花が無料配布されました。又、当日の夕方、本シンポジウムの模様がテレビ放映されました。



付記：シンポジウムの広報活動には地域共同研究センター、会場案内には本学生達のご協力によるものであります。

（海洋環境学科教授 森永 勤）

満員の会場では島民、一般都民、研究者等多数の聴衆が熱心に発表に耳を傾けました。



トピック4 「天草町ふるさと応援隊活動」報告

私は、10月15日から24日までの10日間、（財）都市農山漁村交流活性化機構の「平成14年度知恵を生かす地域づくり・人づくり支援事業」で熊本県天草郡天草町へ「ふるさと応援隊」として派遣されました。この事業は昨年度から行われており、農山漁村の地域づくり活動や農林漁業振興に関心がある学生や社会人を「ふるさと応援隊」として、一定期間派遣し、地元の人々との協働を通して各人の有する知恵やアイデア・専門などを今後の地域振興施策の企画・立案に役立ててもらいたいと考えています。

天草町では「地域資源特に「海」を活かした体験メニューなどの地域振興の可能性を探る」ということを目的として募集しており、私は在籍している水産学部という特徴を生かし、水産という視点から地域づくりをしてみたい、漁村地域に現存する多くの問題点や良い点を勉強したいという理由から応募しました。

天草での現地研修では、役場の方々、漁協の方々との話し合いや、Uターン者が行っている海の自然学校、天草の塩作りの補助や、ダイビング体験など日々の生活では体験することのできない



応援隊参加者と町役場の皆さん。報告者は最後段右中央。

様々な活動をし、充実した10日間で、学ぶことが多かったと思います。

研修終了後、自分なりに考えた天草町の問題点の解決策や今後の方向性を「提言書」としてまとめ、多くの雇用を生んでいる漁協の衰退への対策や、天草の自然を生かした環境教育の推進策など

いくつかの提案をしました。これが少しでも天草町の役に立てたら光栄だと思います。（海洋環境学科3年 鈴木宏介）

トピック5 全科展in東京2002

11月20日（水）から22日（金）まで全科展in東京2002（主催：日本科学機器団体連合会、日本工業新聞社）が東京国際展示場「ビッグサイト」にて開催されました。アジア最大の規模の総合展として最新の技術・機器・情報が展示され、期間中は380社に及び出展社があり、来場者は約55,000人に及びました。さらにNEDO（新エネルギー・産業開発技術総合開発機構）実用化開発助成事業成果展示会2002も同時開催され、環境対策、リサイクル技術、機械装置、材料製造技術、エネルギー、ITなど76件の出展がありました。



リエゾンセンターでも研究開発交流・TLOプラザにてブース出展を行い、食の安全を巡る問題に関して、水産資源を中心にした安全な漁業養殖環境、加工・流通における食の危機管理、資源のトレーサビリティで適用可能な成果物等に関しての東京水産大学の取り組みを紹介しました。

（リエゾンセンター技術補佐員 川村香織）

トピック6 テクノオーシャン2002

海洋の科学技術に関する総合的な国際コンベンションとして、日本で唯一定期的（隔年）に開催されている「テクノオーシャン」は、このたび9回目の開会を迎えました。今回は、21世紀における継続的・発展的な「テクノオーシャン」の開催を目指して組織された「Techno-Ocean Network」が中心となり、また創立30周年を経た海洋科学技術センターと財団法人地球科学技術総合推進機構を主催とし、「A Vision of Ocean Networks」をメインテーマとして、11月20日（水）から22日（金）まで神戸国際展示場にて開催されました。

リエゾンセンターでは、本コンベンションへのはじめてのブース出展をおこない、技術相談やリエゾンセンターの活動内容の紹介等を行ないました。また、本学の取組みを「海と漁を科学する」をテーマに海洋にかかわる研究内容を中心に紹介し、本学の活動内容を積極



水産大ブースと会場の様子。水産大のお隣は、東京商船大学海洋工学研究室のブースでした。

的に発信しました。更に、海洋関連産業等の出展による国際エキジビションでは、今後の研究開発に関する有用な情報を得ることもでき、海洋関連企業との国際的・横断的な交流を持つことができました。

海洋という大自然は人類に残されたきわめて貴重な財産であり、海洋環境を保全しつつ海洋を利用するために、今後、海洋の総合的な管理が重要になると思われます。本会で得た社会の情報を逃すことなく本学の研究、教育活動に還元し、今後も産学連携をますます推進していきたいと考えています。

(NEDO受託研究員 河口真紀)

トピック7 産学共同セミナー「出前講義」について

7月に第3回ジャパンインターナショナルシーフードショーで開催されたセミナーに引き続き、9月20日には長崎市（アリーナかぶとがに）で開催された第2回水産養殖技術展の関連開催として「魚類養殖とHACCP」、10月26日には鹿児島大学水産学部において「養殖魚介類疾病の診断と防疫先端技術」のセミナーを実施いたしました。長崎でのセミナーには約200名、鹿児島でのセミナーには約160名の参加者を得て、盛況のうちに開催することができました。セミナー終了後のアンケートでも、概ね好評をいただきました。本年度はできるだけ多くの講師にいろいろなテーマで講義をしていただき、社会人のブラッシュアップと大学院学生に産業界の現状を教育するためのプログラムを開発することを目的としておりましたので、もう少し講師を減らしてじっくり話を聞きたいという希望も多く、来年度以降、講義内容や実施方法をさらに検討して、参加者の満足できるセミナーの実施を企画したいと思っております。

なお、各セミナーの講師ならびに講演題目を右に示します。

(資源育成学科助教 舞田正志)

「魚類養殖とHACCP」

1. 水産用医薬品の使用と人への健康危害（東水大 廣野助教授）
2. 遺伝子組み換えと食品の安全性（医薬品機構 三瀬勝利氏）
3. 環境中の有機スズ化合物と魚類への蓄積（鹿大 小山教授）
4. チリにおける養殖HACCP（ニッセイ 原田厚氏）
5. 養殖HACCPと飼育履歴情報公開システム（東水大 舞田助教授）

「養殖魚介類疾病の診断と防疫先端技術」

1. 養殖場における疾病の現状（鹿児島水試 竹丸巖氏）
2. 栄養改善と抗病性（鹿大 越塩教授）
3. 環境要因と抗病性（東水大 舞田助教授）
4. ワクチン開発の現状と将来（阪大微研 真鍋貞夫氏）
5. 自発摂餌と養殖魚の免疫（東水大 延東教授）
6. 三倍体魚の抗病性（鹿大 山本助教授）
7. バイテクと魚類防疫（東水大 青木教授）
8. 分子生物学的手法による魚類感染症の診断（東水大 廣野助教授）
9. 養殖魚の耐病性と育種（東水大 岡本教授）



受付は右から舞田助教授（報告者）、野助教授、河口研究員



いずれも、長崎での「魚類養殖とHACCP」セミナーの様子。広い会場にも満員の盛況でした。

九州芸術工科大学地域共同研究センター教授 湯本長伯

産学連携学会設立の準備が、佳境に差し掛かっています。この稿では、産学連携学会の目指す内容・体制、東京本部・中央事務局となる東京水産大学地域共同研究センターとの関わり、そして設立まで数ヶ月となった学会への参加お誘いを、極く簡単に記します。

私は永年、異種融合新事業創造を標榜して来ましたが、これを意識的意図的、更に組織的に行うのが、現代の「産学連携」というものであり、日本社会の構造変革と活性化の鍵と言えます。このことは単なる試行錯誤では限界があり、きちんと事例・知識を集蓄積し体系化構造化し、知的支援を強めて行くことで、質的変換・状況突破を果たし得ます。このことは学問としての領域を確保することであり、また学会の存在は、若い人たちにもきちんとした職業の領域であるというメッセージになって、産学連携がサステナブルな営為となる訳です。

永年に渡る国立大学地域共同研究センター関係者の努力を踏まえて、全国の国立大学ネットワークを軸に、文部科学省系・経済産業省系・自治体系・民間企業系という、4つの大きな産学連携グループを連携し、全国ネットの結節点としても地域センターとしても各大学センターが機能し、日本の変革と活性化に貢献した

と思います。こうした想いを共有する、水産大・中村先生初め5人の幹事と共に、今設立準備に大奮ですが、こうした内容を支えて行く学会実務のエンジンとして、水産大センターが準備を進めています。熱心なスタッフと素晴らしいロケーションが相俟って、全国のセンターとして機能するでしょう。大きな期待が、寄せられています。

そこで読者の皆様にも、ぜひ異種融合新事業創造を目指し、ま



7月に水産大学で開催された、学会設立準備会の様子。中央正面が湯本先生です。

た新しい水産日本の創造を目指して、この学会へ参加されることを、心よりお誘い申し上げます（問い合わせは東京水産大学地域共同研究センターまでお寄せ下さい）。

若手コーディネータの会のお知らせ

第1回全国若手コーディネータ会議のご案内

リエゾンセンターNEDO受託研究員 河口真紀

現在、大学等公的研究機関などに配せられ、産学連携業務に携わるいわゆる「コーディネータ」は、雇用形態・身分・呼称そのものもバラバラで、コーディネータとしての横の連携は殆どなく、コーディネータたる人材の実数すら明確ではありません。そこで、このような連携の現場で実務的にリエゾン機能の役割を果たしていながらも身分等に多くの課題や悩みを持つ、特に若手コーディネータ（様々な呼称、身分のため、実態としての機能、役割で判断）により、現状の問題点を抽出し、改善などのアクションプランを策定することは急務の課題であると考えます。

このたび、有志により「全国若手コーディネータの会」を設立し、コーディネータ間の連携を密にし、コーディネータとしての技術を向上させる勉強会・懇談会等を下記日程で行いたいと考えています。奮ってご参加ください。

日時：平成15年1月23日（木）13：30～17：30
 場所：東京水産大学 講義棟42番教室
 題目：「コーディネータの活動を考える」勉強会および懇談会
 1) 産学連携に関する勉強会
 ・「産学連携と人材の育成」
 九州大学先端科学技術共同研究センター 斎藤教授
 ・「産学連携学会設立に向けた現状」
 九州芸術工科大学地域共同研究センター 湯本教授
 2) 若手コーディネータの会（会合・交流会）

【想定される参加者】

- ①産学連携学会の趣旨に賛同している当学会の会員予定の方。
- ②地位としても技術としても未熟なものと自覚している方。
- ③コーディネーションを本務（専門）たらんとしている方。
- ④おおむね社会人経験が10年未満程度（あくまで大まかな基準であり、これに限らず）の方。

例えば：

- NEDO「産業技術養成技術者／フェロー」
- 研究支援推進員
- 事務補助員・技術補佐員等非常勤雇用職員

任期つきの助手等

※ただし、勉強会については、参加資格等の制限は設けておりません。

【参加登録方法】

- ①氏名
 - ②所属（職名）
 - ③連絡先
 - ④懇談会に対する希望
- ①～④の項目をご記入の上、電子メールにて下記「呼びかけ人」までお申し込みください。

【呼びかけ人】

東京水産大学地域共同研究センター
 河口 真紀（こうぐち まき）
 〒108-8477 東京都港区港南4-5-7
 電話番号：03-5463-0859
 FAX番号：03-5463-0894
 E-mail：link-mk@tokyo-u-fish.ac.jp

九州大学先端科学技術共同研究センター
 （リエゾン部門）
 香月 亜美（かつき あみ）
 〒816-8580 福岡県春日市春日公園6-1
 電話番号：092-583-7918
 FAX番号：092-583-7209
 E-mail：katsuki@astec.kyushu-u.ac.jp



センターからのお知らせ センター関連会議・イベント情報

- | | | | | |
|----------|--|--------|---|----------|
| 1月14日 | 1月度さかな塾（於東京水産大学34番教室）
テーマ：年末商戦の反省と改善ポイント
仕入れのポイント
発注と在庫管理
商品回転と販促
主力商品の育成法⑧（開き・丸干し類）
ゲスト講師 婁小波（資源管理学科助教授）
「海外から見た日本の水産流通について」 | 2月 5日 | 水産高校21世紀委員会（於ナビオス横浜） | ゲスト講師：未定 |
| 1月23日 | 第1回全国若手コーディネータ会議（於東京水産大学42番教室） | 3月 4日 | 3月度さかな塾（於東京水産大学34番教室）
テーマ：輸入魚急増と今後の見通し
主力輸入魚の問題点とポイント
養殖魚比率と品質
一次加工・二次加工の海外委託と問題点
主力商品の育成法⑩（貝類・うに） | |
| 1月27～29日 | 国際特許流通セミナー（於ロイヤルパークホテル：主催発明協会） | 3月7～8日 | 平成14年度西日本ブロック専任教員会議及び幹事会（於アークホテル岡山） | ゲスト講師：未定 |
| 2月 4日 | 2月度さかな塾（於東京水産大学34番教室）
テーマ：商品表示と問題点
商品毎の産地是非比較（鮮魚・冷凍・塩干・加工品）
主力商品の育成法⑨（いか・たこ） | 2月下旬 | 港南街おこしシンポジウム（仮称：詳細未定） | |
| | | 3月下旬 | 食の安全を巡るシンポジウム（仮称、於東京水産大：詳細未定） | |
| | | 1月～3月 | 水産振興講演会（仮称、於銚子市：詳細未定） | |

産学連携協力会のコーナー

協定会後援イベント「就職ってどうなの？」開催報告

第43回東京水産大学海鷹祭の中日11月3日（日）の午後2時～5時に「就職ってどうなの？」というイベントが開催されました。「就職ってどうなの？」では、本学学生により構成された実行委員会が主催となり運営にあたり、共催を地域共同研究センター、後援を産学連携協力会として行いました。実行委員会の代表として、会の報告をさせていただきます。

本会は就職について現実味を帯びてきている大学3年、修士1年を対象として、それぞれの職場の最前線で活躍する方々の生の声を聞くことで、様々な仕事の内容を理解すること、各人の「職」についての考えを再考すること、多様な職があるということのを再認識し今後の就職活動に役立てること、などを目的として行いました。フリーイラストレーターやテレビ制作、NPOなどユニークな職場に就いている方々をはじめ、食品水産加工会社研究職や水産高校教諭、公務員などの主に本学卒業生の方々に講演をして頂きました。

学祭開催中という事で会場外の騒音が著しく、講演者・聴講者ともに多大な御迷惑をお掛けしましたが、講演者には短時間で多種の職業の話や、学生のニーズに合った内容で話して頂き、聴講者、特に学生には好評で、「このような会をぜひもう一度やって欲しい」という意見も聞かれました。

学生は就職活動を開始するにあたって、初めて人生を、自分の将来を考えるといても過言ではありません。今後もこのような機会を何度か持つていくことで、我々学生の就職に対する意識が向上できたらと考えております。それは何より、学生が自分達の生活を真摯に見直すきっかけになると思うからです。

本会を運営するにあたって、支援して下さいました地域共同研究センターの方々、ご後援下さいました産学連携協力会に感謝申し上げます。

（「就職ってどうなの？」実行委員会委員長 鈴木宏介：海洋環境学科3年）



大学祭開催中ということで、学生以外に一般来学者、父兄も参加されました。

協定会関連イベント記録

実施済みの本年度協定会関連イベントをご報告します。

月 日	内 容	場 所	形 態	備 考
6月 4日	第一回さかな塾	東京水産大学	主 催	参加者 109名
6月10日	新型冷凍機デモ講演会	東京水産大学	主 催	参加者 40名
7月 2日	第二回さかな塾	東京水産大学	主 催	参加者 81名
7月24日～26日	シーフードショー	東京ビッグサイト	後 援	来訪者 約400名
7月25日	シーフードセミナー	東京ビッグサイト	主 催	参加者 80名
7月26日	産学共同教育プログラム	東京ビッグサイト	支 援	参加者 100名強
8月 3日	金魚500年祭	東京水産大学	後 援	参加者 約150名
8月 6日	第三回さかな塾	東京水産大学	主 催	参加者 129名
8月27日	高度技術研修：食品生産の高度監視技術研修	東京水産大学	支 援	参加者 12名
9月 3日	第四回さかな塾	東京水産大学	主 催	参加者 125名
9月19日～20日	第二回水産養殖技術展	長崎県立総合体育館	後 援	来訪者 約200名
9月19日	産学共同教育プログラム	長崎県立総合体育館	支 援	参加者 約200名
10月 1日	第五回さかな塾	東京水産大学	主 催	参加者 99名
10月12日	三宅島漁業復興シンポジウム	都民ホール	後 援	参加者 約120名
10月30日	水産ゼロエミッション研究会	東京水産大学	支 援	参加者 40名
11月 3日	海鷹祭イベント「就職ってどうなの？」	東京水産大学	後 援	参加者 60名
11月 5日	第六回さかな塾	東京水産大学	主 催	参加者 102名
11月20日～22日	テクノオーシャン2002	神戸国際展示場	後 援	参加者 約300名
11月20日～22日	全科展in東京	東京ビッグサイト	後 援	来訪者 約200名
12月 3日	第七回さかな塾	東京水産大学	主 催	参加者 90名
12月13日	産学公東京技術交流会	都庁	後 援	来訪者 20名
12月17日	高度技術研修：魚介毒分析技術を中心として	東京水産大学	支 援	参加者 10名

後援：一部経費も負担してサポート 支援：経費負担を伴わない人的等サポート

主な出来事と来訪者

10月 1日 第五回さかな塾（主催産学連携協力会）
10月 2日 「湾岸リーグ」首都圏産学連携コーディネータ会議
10月 7日 三宅島復興シンポジウム検討会（於都水試）
10月10～11日 全国共同研究センター・センター長会議（於京都リサーチパーク）
10月12日 三宅島漁業復興シンポジウム（於都庁）
10月15日 港南地区振興の件、学園祭協力依頼（於天王洲開発機構）
10月17日 運営委員会
10月18日 センター活動意見交換（北大先端科学技術共同研究センター 浜田研究員）
10月25日 地域振興の件（於銚子市役所）
10月30日 水産ゼロエミッション研究会
11月 1日 全国共同研究センター・専任教官幹事会（於東京農工大）
11月 3日 海鷹祭イベント「就職ってどうなの？」開催（後援産学連携協力会）
11月 5日 水域浄化の件（於国立環境研）
11月 5日 第六回さかな塾（主催産学連携協力会）
11月 8日 知財本部設立作業部会
11月12日 大学評価ヒアリング「研究活動面における社会との連携及び協力」（於大学評価機構）
11月13日 港南地区振興の件・雑誌取材

11月20～22日 テクノオーシャン2002出展（於神戸国際展示場）
11月20～22日 全科展出展（於東京国際展示場）
11月21日 地域振興に関する講演（於品川ロータリークラブ）
11月25日 共同研究打ち合わせ（沖縄県水試、沖縄県工業試験センター）
11月27日 センター活動意見交換（琉球大照屋産学連携コーディネータ）
11月28日 センター活動意見交換（北見工大地域共同研究センター 斎藤教授、宇都助教授、内島研究員）
12月 2日 運営委員会
12月 3日 総合学習に関する相談（市川市立大洲中学校一行）
12月 3日 第七回さかな塾（主催産学連携協力会）
12月 5日 水産廃棄物処理の件（於大日本水産会）
12月11日 第二回「湾岸リーグ」（於東京商船大学）
12月13日 産学公東京技術交流会（於都庁）
12月15～16日 共同研究センター活動勉強会（於島根大学地域共同研究センター）
12月17日 井上客員教授講演会
12月17日 高度技術研修：HPLC技術研修－魚介毒分析技術を中心として

<10月～12月来訪者>
技術相談来訪者 26件
特許相談来訪者 4件

スタッフ紹介 産と学のギャップを埋める

客員教授 小金民造（神奈川県産業技術総合研究所専門研究員）



2001年のノーベル化学賞を受賞した野依良治名古屋大学教授と企業研究者との対話が新聞に掲載されています。

企業研究者「どんな応用が考えられるだろうか」
野依良治教授「それはあなたが考えることだ」
（平成13年10月16日、日経産業新聞の記事より抜粋）

大学教授の研究は基礎研究に重点が置かれていることが多く、実用化あるいは製品化までには企業でさらに研究を重ねなければなりません。このようなことから、大学と企業との間には研究開発についての意識に大きなギャップを感じとれます。しかし、純粋な基礎研究であっても、見方を変えれば産業への応用の道が開ける可能性が高いことは、3年連続でノーベル化学賞を受賞した先生方の研究業績を引用するまでもないことです。大学における基礎研究の重要性は、横浜国立大学で5年間産学連携に携わって来て改めて実感したことです。

国立大学の共同研究制度は企業人（研究者・技術者等）が大学で研究するだけでなく、大学の教官（研究者）も企業に出向き、その施設や研究機器を利用できるようになっています。大学と共同で実用化あるいは製品化を目指す企業に有効に活用してもらいたい制度です。企業人には大学教授との共同研究に積極的に参加してもらい、自らが研究成果をシーズとして捉え、著名な彫刻家が原木に埋められている像を「彫り出す」と表現するように、研究シーズから技術を「彫り出す」ことが期待されています。言い換えると「技術を見抜き目」を持つことが必要であり、且つ、そのような「目利き」の人材を育成することが産学共通の課題であると思います。

産学連携の成功のためには、目先のことばかり追わないで、少し長い目で見ることが産と学の意識のギャップを埋め、真の産業界への貢献、社会貢献につながるのだと思います。

技術補佐員 川村香織



技術補佐員として10月から勤務しております川村香織です。現在は研究者データベースの作成、Fishipメールマガジン（<http://fiship.org/mailmag/form.html>）の配信等を担当しております。今後は、地域貢献に関する諸活動の支援業務も行ってまいります。

今まで派遣社員として色々な企業で事務補佐として勤務しましたが、前職では通信会社の広報関連の仕事に携わっていました。その経験をリエゾンセンターでの活動に生かせればという思いで応募しました。出身が文系大学なので水産業界や産学連携業務に関してはまだまだ勉強不足な点もありますが、一つ一つセンターの活動を知ることに関心が湧いてきています。

海や自然が大好きで趣味は旅行です。休みの日は都内をサイクリングして東京の街にも小さな自然を発見することが良くあります。都会に身近な癒しの空間を作ろうというイルカプロジェクトは是非実現させたい地域貢献活動です。これから、微力ですがセンターの活動の推進をお手伝いできればと思っています。どうぞ宜しくお願い致します。

編集後記

本学に赴任して瞬く間に一年半が過ぎ、二度目の正月を迎えようとしております。当初から私の活動に「ご苦労様」と学内外から声援をいただき、改めてお礼申し上げます。ただ、ここで一言申せば、どなたも本学の教官各々の日頃の研究活動に、きっと「ご苦労様」の声は掛けないだろうということです。実験解析で徹夜をしようが、真冬の船上作業に凍えようと、それは皆さまに研究者としての当然の行い。眠かろうが、しんどかろうが、何程のことがある、と言うものだと思います。

研究者としての教官の日常の全てが研究活動に結びついているように、私のこのセンターでの活動の全ては、その意味で一般の教官の研究活動と同じものである、と言うことにそろそろ気がついていただきたいと思います。私の日々の活動は、教官の弛まぬ研究の成果を、従業員一同頑張って顧客の喜び製品に作り上げている民間の皆さんの役に立てる手立てを作り上げることで、製品化の過程に現れる新たな研究課題を、再度大学の活動にフィードバックさせる仕組みを作ること。これが私の「実験」であり、これが私の「研究」なのです。この活動が極めて専門性に富み、創意工夫を要することは、すでに皆様お気づきのことと思います。この内容を更に高め、普遍化し、次世代につなぐこと。これはとりもなおさず研究者の環境とその成果の質を守り、よりよい産業を育て、ひいては市民生活の向上につながることに信じております。

今回、九州芸工大の湯本先生に、産学連携学会設立の案内を寄稿していただきました。この設立に深く関わる一員として、まさに、学としての産学連携が一步踏み出したことに喜びを感じるものです。産学連携が学として成立するのか、とお思いかもしれません。もちろん「産」と「学」という文言はあくまでも象徴的な意味合いのことです。が、「産」と「学」とが異なる社会的基盤、異なる価値観の、まさに対局にあることはだれしも認めるところです。この二つに象徴される、社会の様々な異なる役割の連携こそがイノベーションの鍵になると思うのです。この「連携」が、私の担う役割であり、この研鑽の場が産学連携学会であります。これまでこの連携のコーディネータとしては、民間企業で経験を積んだベテランの活動に負うところ大でした。しかし、今回センターの一員である河口研究員が呼びかけ人の一人として声を上げているように、いよいよこの職務を志す若手の人材も育とうとしてきております。期待に胸が膨らみます。

かくして本学教官の皆様から、もはや「ご苦労様」とは声掛けられず、ただ当たり前のことをやっておるわいと、認められる日が近づいたような気がするのです。淋しくもあり、うれしくもあり。。。

制作発行：東京水産大学リエゾンセンター
（地域共同研究センター：育成棟101室）
編集者：中村 宏
連絡先：〒108-8477 東京都港区港南4-5-7
TEL 03-5463-0859
FAX 03-5463-0894
E-mail aquatio@tokyo-u-fish.ac.jp